
虎になった男

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虎になった男

【Nコード】

N2279J

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

「よっ、お久しぶり」突然声をかけられ、私はびっくりした。ビツクとすると肩が上がるのは何故だろう？ まあ、そんなことはどうでもよくて。「えっと、どちら様ですか？」「俺、俺。覚えてない？ 昔よく一緒に飲んだじゃん」

(前書き)

中島 敦「山月記」を元にして作っています。

「よっ、お久しぶり」

突然声をかけられ、私はびっくりした。

ビックとすると肩が上がるのは何故だろう？

まあ、そんなことはどうでもよくて。

「えっと、どちら様ですか？」

「俺、俺。覚えてない？昔よく一緒に飲んだじゃん」

最近はやりのオレオレ詐欺ではないようだが、私自身全く身に覚えがない。

一体何処でどう知り合ったのだろうか。

虎に。

そう、彼は虎であった。

私は勅命を受け、旅に出たところで、何故か虎に声をかけられていた。

この付近では人食い虎が出ると聞いていたので、もしかしたら目の前にいるこの虎こそが、そうなのかもしれない。

「俺だよ。覚えてないかな。李徴だよ。まあ、こんな姿になっちゃ分からなくとも仕様がなにか」

確かに李徴は私の古い友人である。

だが、彼は人であり、虎ではない。

とは言え、ここで妙なことを言って喰われてしまつては敵わない。

私は話を合わすことにした。

「おお、そうか。李徴か。久しいな。いつ以来だろうか」

そう私が言うと、虎は目を丸くして、私を見た。

何かまずいことを言っただろうか。

「おお、お前は私が李徴だと分かるのか。こんな姿になつても」

「ああ。そりゃ、驚いたけどな。古い友人がそんな姿になっていたら。けど、なんていうか雰囲気が一緒だからな。すぐに気づいたさ。

それにしても何でまたそんな姿に」

「それがだな・・・」

虎の話によると、李徴は県の官吏としてその将来を約束されていたにもかかわらず、『詩家としての名を死後百年に遺そう』として詩人としての道を歩みはじめるものの、なかなか思うように名を成すことができないまま、時が経つにつれて募ってくる焦燥と貧困、そして自身の才能に対する絶望のはてに、気がつくやうに野山を駆け回っている今の姿に気づいたと語った。

「それはまあ、大変だったな」

適当に相槌を打ちながら聞いていたので、虎は私をジト目で見ていた。

「お前、聞いていたのか、私の話を。というか、本当は俺が李徴だって信じてないだろ」

「いや、信じているさ。けれども常識的に考えて、人が虎になったというのは無茶があるって思うだけで・・・」

「ふん。まあ、いい。それならこっちも考えがある」

そう言いながら虎がにやりと牙をむいて笑った。
しまった。

慎重に話をしながら、隙を見て逃げようと思っていたのに、虎の話が長いからつい本音が出てしまった。

そして、虎は口を開いた。

「初めは近所の年上のお姉さん。緊張しながら告白したら、ガキは相手できないと一蹴され、俺に泣きついたよな。そのことがトラウマになったのか、次は手紙で告白しようとしたよな、お前は。相手は通っていた先生の娘さん。今度は内容が悪いと、その場で手紙を破られ、膝を折り、泣き崩れていたよな。そして、次は・・・」

「もう、いい！分かった、分かったから。信じるよ。お前が李徴だって」

近所でも天才と噂される李徴はもてた。

将来が期待されるという理由で、今のうちに唾をつけておこうとい

う女が多かったのである。

結局、女は金によってくるのだ。

けっ。

「そうか。分かってくれたか。なら、いい」

私はその場に崩れ落ち、過去のトラウマに胸を痛めた。

全く、この虎は人の過去でも読めるのか？

私は虎を睨みつけると、虎は明後日の方向を見ていた。

その目はなんだか寂しそうで、

「最後にこんなに良いひと時を過ごせてよかった」

「最後？」

「ああ、もうこんな姿になってしまっただけは人として生き方は無理だろう。これからは虎として生きていかねばならないだろうから。けれど、そうは思ったところでなかなか踏ん切りもつかなくてな。そんな俺を憐れんで、もしかしたらお前を神様がよこしたのかもしれないな」

そう言って虎は笑った。

その笑いは李徴の笑い方によく似ていた。

どこか自嘲気味で、自信があふれているようで、影がある笑い方。確かに李徴は才はあった。

けれども、他を寄せ付けず、一人孤独に没頭することが多かった。

もし、虎の話が本当なら、虎になったその夜、誰かが側にいたなら。もしかして、李徴は虎にならずに済んだかもしれない。

「お前も気をつけろよ。俺みたいに虎にはならんと思うが、人の世も様々だから」

そう言って虎は去っていった。

果たして本当にその虎が李徴だったのか私には分からない。

そもそも人はどうあがいても虎になどなりはしない。

けれども、私はあの虎が李徴では無いとも断言できないでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2279j/>

虎になった男

2010年10月9日04時00分発行